

二〇二六年度

二月四日午後入試

国語 (45分)

注意 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。

2 答えはすべて解答用紙の解答らんに、はっきり書きなさい。

3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。

4 問題のページは、
6-1 から
6-13 まであります。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

戸田柚葉は自作の物語をクラスメイトにからかわれて以来、学校へ行くことができなくなっていた。しかし、朗読に興味のある同級生の山根朝佳と出会い、「文化祭で柚葉の作品を朗読したい」と提案され、二人で「朗読ライブ」を行うことになった。二人は練習を重ね、文化祭当日をむかえた。

今日の朝佳のコンディションは、かなり良くない。朝に会ったときから、そのことには気づいていた。明らかに寝不足気味の充血した瞳をしているし、打ち合わせのときもやたらテンションが高く、落ち着いていない。

でも、今日は朝佳の晴れ舞台だ。過剰に心配して、朝佳のやる気をそいではいけないと柚葉は自分自身に言い聞かせていた。

※ 図書室で準備をしながら、柚葉の心に(ああ、学校に戻ってきたんだ。)という思いがゆっくりとにじんできた。

正直、まだ怖くないかといえは、おなかの底が冷たいし、ときどき足が震える。でも、自分の世界を、少しずつ広げていくって決めたんだ。

① 本番が近づいて図書室の席がほぼ埋まってくるなか、柚葉はゆっくりと呼吸を整えながら客席を見ている。朝佳のご両親とお祖母さんと伯母さんが朝佳に手を振っているのを見つけ、自然と口元に微笑みが浮かぶ。

(朝佳ちゃん、よかった。ご家族が来てくれて……)

朝佳にそのことを教えてあげようとしたとき、図書室の後ろの引き戸ががらりと開いた。入ってきたのはまぎれもなく母で、柚葉はひゅつと息を飲んだ。

(お母さん、スーパ―抜けてきてくれたんだ。)

思った以上に嬉しくなって、柚葉は戸惑った。いけない、ここで私まで緊張しちゃったら、だいなしになる。朝佳も、柚葉の母が来たことに気づいたらしく、ちらっとこっちに視線を投げて微笑んでくれた。正直、そんな余裕はないはずなのに、^②そうしてくれる朝佳の優しさがしみた。

朝佳は、柚葉の母が席についたのを確認して、司会の横峯さんにさっと手を挙げ合図する。横峯さんがうなずき、なめらかな口調でアナウンスを始めた。

「——では、お二人をどうぞ拍手でお迎えください!」

拍手が朝佳と柚葉を包むなか、発表スペースのほうへと移動した。並んでお辞儀をして、朝佳は譜面台と向き合い、柚葉は隣の椅子に腰かける。

隣の朝佳が息を吸い、タイトルを読み上げようとしたそのとき——図書室の後ろの入り口から、バタバタと駆け込んできた一人の女子生徒がいた。

その子を認めて、隣の朝佳が硬直した。柚葉もすぐさま気づいた。
(きつと、あの子が、朝佳ちゃんが手紙を書いた相手だ。)

そのまま朝佳が女子生徒を見つめっぱなしのまま、動きを止めたので柚葉は焦った。あわてて、「朝佳ちゃん、朝佳ちゃん! ——タイトルっ。」

と、朝佳をつつく。朝佳がはっと我に返り、ぴよこんと姿勢を正した。

「ほ、本日読み上げるのは『チイとサヤの収穫祭』というお話です。みなさんどうぞ、楽しんでってくださいねっ。」

ただでさえ緊張しているところに、来てほしかった相手が実際に現れて、朝佳は動転している。そのことがひしひしと伝わり、柚葉は（まずい。）と思った。

朝佳が原稿をいつもより早口で読み始めて、柚葉は思わず眉を寄せる。たぶんきつと、立て直せていない。

柚葉は膝の上でこぶしを握り締めた。朝佳が、いつもの半分力も出せていない。普段の朝佳は、もっとすごい。みんなを惹き付けてやまない語りができるはずなのに、今日はかなり調子を崩している。

朝佳がふいに、譜面台の原稿から視線を上げ、客席のほうを見た。通常よりもずっと青い顔をしていて、おそらく自身でも今日の朗読が不調なことはわかっているようだった。

朝佳の視線の向かっている先が、さっきの女子生徒であることに気づいた。その女の子は、一番後ろの席に座っていたけれど、まっすぐに朝佳のほうを、にらむかのように見つめている。あんな視線に射抜かれたら、自分だって怖くなってしまいかもしれない。

柚葉はそのとき、はっと固まった。

I
「朗読が止まっている！」

隣の朝佳を見ると、制服のスカートからすらりと伸びた彼女の足が小刻みに震えていた。過度の緊張で声が出ないのかもしれない。

客席が、ふたたび始まらない朝佳の朗読にざわざわはじめた。手に汗を握って見守るうちに、幾人かの生徒からくすくす笑いが漏れ始める。

朝佳が、笑われている。その事実には、心がかつと熱くなった。

すぐさま、一年生の夏に自分が教室で笑われたことがフラッシュバックのごとく重なり、強い怒りが湧き出ない、冷静にならなくちゃ。どうすればいい——？

三秒ほど思索し、はっとひらめいた打開策があった。でも、それには、教室にふたたび入る以上の、柚葉のなかのすべての勇気をかき集めてもまだ足りないほどの強い決意が必要だった。けれど迷うよりも先に、気づけば柚葉は椅子から立ち上がった。

どよめきのなか、呼吸をひとつとして、心を落ち着かせる。朝佳に習った腹式呼吸だ。柚葉は譜面台をのぞきこむと、朝佳が読み終えた箇所から、その続きを引き取って読み始めようとした。そんな柚葉を、朝佳が驚いたように見つめる。

（朝佳ちゃん、ここは私にまかせて。）

柚葉はそんな思いをこめて、朝佳に目配せした。客席は一瞬ざわついたのち、波が引くように静まる。自分の声が頼りないのは知ってる。朝佳みたいに上手に読めたりはしないし、響き渡りもしない。でも、ここでやるしかない。

決意のままに柚葉が改めて顔を上げ、図書室内を見渡したそのときだった。柚葉の目に、図書室後方の入り口のほうに固まっている女子三人が目飛び込んできた。

※ちひろと紗英と藍だ。三人の登場に、思わず動揺してしまう。ちひろは、柚葉を見定めるように、険しい表情で腕を組み、藍と紗英はかたずをのんでこちらを見ていた。柚葉の足から、ぶるりと震えが這い上る。それでも、顔を上げた。

(ここで朝佳ちゃんを一人にはできない……！)

続きを確認し、読み上げ始める。出した声が頼りなく震えた。ほんとは怖くて仕方ない。でも、柚葉の頭のなかには、朝佳が今朝が話してくれた言葉が瞬間浮かんでいった。

(『あのね、夏目さんが言っていたんだけど、一番後ろにいる人にまで聞こえるような声を出すイメージで読むといらしいんだって！ よーし、がんばらなきゃ！』)

図書室の一番後ろにいる人——それはちひろたちにほかならない。④ 柚葉は息を吸い込むと、声のボリュームを三段階ほど上げた。

笑うなら、笑ってみなよ。柚葉は声を出しながら思う。紗英が、藍が、ちひろと一緒にこの物語を笑ったとしても、自分は胸を張って読む。自分自身と書いた物語を信じる気持ちをくれた朝佳のかわりに、このライブを最後まで——。

おなかの底から声を出しながら、柚葉はちひろが図書室の後ろの入り口から出ていくのを見た。紗英と藍は、ちひろの後を追っていかない。二人は、そのまま柚葉の朗読を真剣な眼差しで聞いていた。

中盤まで読み、柚葉がひと息ついたそのとき——柚葉の制服の袖を、朝佳が引っぱった。隣をはっと見やると、そこには落ち着いた表情をしたいつもの朝佳がいた。

「柚葉ちゃん、ありがとう。もう大丈夫。」

朝佳の顔つきを見て、柚葉は確信した。ああ、もう心配ない、と。

目配せした柚葉に朝佳はうなずき、譜面台の正面に立った。そして、はりのあるよく通る声で、続きを読み始める。

最初のひと声が図書室の後ろまで響くやいなや、客席が一瞬あつげにとられたのち、朝佳の朗読にどんどん惹き付けられていくのが柚葉から見てもわかった。

隣で耳を傾けるうちに、柚葉は思わず涙ぐんでしまう。自分の書いたストーリーが、朝佳の放ついきいきとした言葉によって、みるみる命が吹き込まれてゆく。それを間近で見られるのは、⑥ 本当に書き手としてこの上ない喜びだった。

物語が読み終えられるなり、図書室じゅうを温かい拍手の音が包んだ。いつまでも鳴りやまない拍手に、柚葉は胸をなでおろす。

「柚葉ちゃん。」

⑦ 放心していた柚葉に、朝佳が片手を差し出した。その手をとって、再度立ち上がる。朝佳は、柚葉の手を握ったまま、話し出した。

「みなさん、今日このストーリーを聞いてくれて、ありがとうございます。このストーリーを書いたのは、ご紹介のとおり、私と同じ二年生の戸田柚葉さんです。私は柚葉さんに出会ったところ、大好きだった陸上を続ける気持ちを失って、落ち込んでいました。でも、柚葉さんが物語を書くことにチャレンジしているのを見て、私も『朗読』という新しい好きなことを見つけられました。」

⑧ その告白に、希望とぬくもりがじわじわと柚葉の心に広がっていく。

「——今日はみなさん、最初うまく読むことができずに、お見苦しいところを見せてしまって、ごめんなさい。」

朝佳は深々とお辞儀をした。おわびの言葉をフォローするように、また拍手が客席から生まれる。

「でも、みなさんに柚葉さんの作品を聞いてもらえて、本当に私はやってよかったなと思いました。それで、お願いがあります。もしよかったら、何か感想を言ってくださる方、いらっしやいませんか？」

朝佳が急に客席に問いかけたので、柚葉は焦った。

(ちよっと、朝佳ちゃん、アドリブ質問なんて聞いてないよ!?)

一瞬間があつたあと、客席から、知らない男子生徒の野太い声が上がった。

「正直、最初は下手すぎって思った!」

その容赦ない言葉に、柚葉はびくりと固まった。隣の朝佳がどんな表情でいるのか、怖くて確かめられない。しかし男子生徒はにやりと笑うと、両手をメガホンにして大声で続けた。

「でも、交替したところは胸熱だったし、後半はすげー良かった!」

とたん、爆発するように賛同を意味する拍手が湧き起こった。ふいうちすぎる称賛の言葉は、柚葉の心を射抜いた。だめだ、涙が出てくる。そのあとも温かな声援が立て続けに送られた。

「止まってびっくりしたけど、いいお話でしたー。」

「トラブル挽回できてよかった!」

「二人のタッグ、また聞きたいですー!」

⑩ 背を丸め、柚葉は今度こそ泣き崩れた。また聞きたいって言ってもらえることって、こんなに嬉しいんだ。客席の後ろで、南美がふいに椅子をがたと鳴らして立ち上がった。

「朝佳!」

彼女に呼ばれた朝佳が、はっと姿勢を正した。その女の子は、大きな声で叫ぶ。

「チャレンジしっかり見届けたから! 大事なライブ、呼んでくれてありがとっ!」

ちよっと投げやりにも聞こえるその言葉が、逆に彼女の照れ屋な性格を表していた。隣の朝佳が満面の笑みで答える。

「南美! 来てくれて、こちらこそありがと!」

そのまま大きく彼女に向かって両手をぶんぶん振り回す朝佳に、南美と呼ばれた少女が噴き出した。この一幕に、図書室内は改めて大きな拍手と笑い声に包まれた。

図書室の片づけを終えて、朝佳と並んで廊下へ出た柚葉は、辺りを見回した。ライブ中、最後まで残っていたはずの紗英と藍の姿は、そこにはもうなかった。

朝佳が後ろからやってきたので、柚葉は振り返った。そのまま、向き直る。

「朝佳ちゃん。私、わかったんだ。」

「わかった?」

きよんとした朝佳に、柚葉は言った。

「私いままで、誰かに笑われるのは怖いし、嫌だった。でも、笑われるってことは、何かをちゃんとやったんだっていう証拠なんだね。だから、これから笑われることがあったとしても『私は何かをやってみたんだ』って思えたら、それは自信になっていくんだよね。」

朝佳が目を見はる。

「それって、すごいことに気がついたね。本当に、そうだと思う。」

柚葉は、朝佳に片手を差し出す。

⑪ 「朝佳ちゃんのおかげで、私、人生で忘れられない一日ができたよ。本当に、ありがとうね。」

朝佳は柚葉の手をぎゅっと握り返して、瞳を輝かせた。

「うん、私も最高の一日に——いや、失敗したから最高じゃないな、最低だけど最高だったな。リベンジしなきゃ！ 絶対！」

とこぶしを天に突き上げた。

はじけんばかりの笑顔になった朝佳を見て、柚葉は心のなかで（いつもの朝佳ちゃん、復活！）と、快哉を上げた。

（上田聡子『あの子の隣で待つ春は』より）

※（注）

図書室——朗読ライブの会場。

横峯さん——図書室の司書。

フラッシュバック——過去のつらい出来事が今起きていることのようによみがえること。

ちひろと紗英と藍——「柚葉」が中学一年生のとき、同じクラスだった。

夏目さん——「朝佳」に朗読のアドバイスをしてくれた舞台女優。

タッグ——協力して行動すること。

快哉を上げた——心が晴れやかになって、思わず声を上げた。

問一 —— 線① 「朝佳あさかのご両親とお祖母おばあさんと伯母おばさんが朝佳に手を振ふっている」とありますが、この日の「朝佳」の様子として適当なものを次のア～オの中からすべて選び、その記号を答えなさい。

- ア ときどき足あしが震ふるえている。
- イ 寝不足ねふそく気味のようで瞳ひとみが充血じゅうけつしている。
- ウ ゆっくりと呼吸を整ととのえている。
- エ 気持きもちちが高ぶり、落ち着おきがない。
- オ ぼんやりして呼びかけにも反応はんおうしない。

問二 —— 線② 「そうしてくれる朝佳の優やさしさがしみた。」とありますが、「柚葉ゆずは」は「朝佳」のどのような行動に「優やさしさ」を感じていますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 「朝佳」も緊張きんちやうしているはずなのに、自分のことを気にかけてくれたこと。
- イ 「柚葉」に心配しんぱいをかけないように、おどけて緊張きんちやうをかくそうとしたこと。
- ウ 本番前ほんばんまへで余裕よゆうのない「柚葉」のかわりに、「柚葉」の母を探し出してくれたこと。
- エ 自分の母が着席ちゃくせきするのを待まちってから、朗読らうよくライブを始めようとしたこと。

問三 —— 線A 「動転どうてんしている」・B 「かたずをのんで」のここでの意味として最も適当なものを次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

- A 「動転どうてんしている」
- ア 不機嫌きげんで、何も言えなくなっている
- イ 怖こわくて、身動こきがとれないでいる
- ウ 恥はずかしくて、気きままずずくなっている
- エ とてもびっくりして、あわてている

- B 「かたずをのんで」
- ア かくれて様子をうかがって
- イ 意外いがいな出来事に驚おどろいて
- ウ どうなることかと緊張きんちやうして
- エ 不安ふあんな気持きもちちをのみこんで

問四 ――線③「ゆずは柚葉は思わずまゆ眉を寄せる。」とありますが、ここでの「柚葉」の気持ちとして最も適当なものゝ次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 「朝佳」がうろたえながら読み始めたので、朗読会が成功することはないだろうとあきらめている。
イ 「朝佳」がいつもとは違う調子で読み始めたので、気持ちを直していいことを心配している。
ウ 「朝佳」が取り乱して読み始めたので、自分がかわりに朗読したほうがよいのではないかと迷っている。

エ 「朝佳」が緊張からいつもより早口で読み始めたので、練習したかいないといら立っている。

問五

――線Ⅰ「――朗読が止まっているー」、Ⅱ「どうすればいい――？」とありますが、この場面における「柚葉」の気持ちの変化として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 「朝佳」の朗読が止まっていることに気がついて不安になった。声の出せない「朝佳」をやきもきしながら見守っていたが、客席から「朝佳」だけでなく、何もしようとしないう「柚葉」に対しても笑いが起き始めたので、不愉快になった。しかし、「朝佳」の朗読を再開させ、朗読ライブを成功させる方法を考えるために冷静になろうとしている。

イ 「朝佳」の朗読が止まったことに気がついて驚いた。「朝佳」がふたたび朗読を始められない様子をもどかしく見ていたが、客席から笑い声が漏れ始めると、自分の作品が面白くないせいで「朝佳」が笑われてしまったと感じ、くやしくなった。しかし、「朝佳」が最後まで朗読を続ける方法を考えるために自分自身をばげまそうとしている。

ウ 「朝佳」の朗読が止まっていることに気がついて焦りを覚えた。声を出せないでいる「朝佳」を緊張しながら見守っていたが、客席から「朝佳」への笑い声が上がり始めると、自分が教室で笑われた経験と重なってひどく腹が立った。しかし、朗読ライブを再開させ、「朝佳」を助ける方法を考えるために気持ちを落ち着かせようとしている。

エ 「朝佳」の朗読が止まったことに気がついてあせんとした。「朝佳」の朗読が再開することを信じて待っていたが、客席からの笑い声で「朝佳」はさらに緊張してしまったので、朗読ライブは続けられないと落ち込んだ。しかし、笑っている客席と、自分を教室で笑った同級生を見返す方法を考えようと気持ちを奮い立たせている。

問六 —— 線④「**柚葉**は息を吸い込むと、声のボリュームを三段階ほど上げた。」とありますが、ここでの「**柚葉**」の気持ちとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 「ちひろ」達は自分の朗読を聞いて笑うかもしれないが、うまく読めなくても、自分の中で一番大きな声を出して、「朝佳」になったつもりで最後まで作品を読み通そうという気持ち。

イ 自分の書いた物語に自信はないが、「ちひろ」が物語を笑っても、朗読を真剣に聞いてくれる「紗英」と「藍」のために、最後まで読み通して少しでも物語の良さを伝えようという気持ち。

ウ 自分の声は頼りないものだが、上手に読めなかったとしても、「朝佳」から教わった腹式呼吸で一番後ろまで聞こえるように朗読して、「ちひろ」達にも作品を認めてもらおうという気持ち。

エ 「ちひろ」達の前で朗読することは怖くもあるが、「ちひろ」達に笑われても、自分自身と自分の物語を信じる気持ちをくれた「朝佳」のために、最後まで堂々と読み通そうという気持ち。

問七 —— 線⑤「ああ、もう心配ない」とありますが、「**柚葉**」がこのように思ったのはなぜですか。二十字前後で答えなさい。

問八 —— 線⑥「本当に書き手としてこの上ない喜びだった。」とありますが、「**柚葉**」にとってどのようなことが「喜び」なのですか。解答らんの「こと。」につながるように文中の言葉を使って四十字以内で答えなさい。

問九 —— 線⑦「放心していた**柚葉**に、朝佳が片手を差し出した。その手をとって、再度立ち上がる。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 「その手をとって、再度立ち上がる。」とありますが、「**柚葉**」が最初に立ち上がったのは何をしようとしたときですか。解答らんの「とき。」につながるように文中から三十五字以内でぬき出し、はじめと終わりの五字をそれぞれ答えなさい。

2 「放心していた**柚葉**に、朝佳が片手を差し出した。」とありますが、この時の「朝佳」の気持ちはどのようなものだと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 困難と一緒に乗り越えて、朗読ライブをやりとげた達成感を「**柚葉**」と分かち合いたいという気持ち。

イ 朗読を途中で止めてしまい、ライブを失敗させたことを「**柚葉**」に許してもらいたいという気持ち。

ウ 今まで「**柚葉**」に頼りきりだったので、最後は自分が中心となってライブを盛り上げたいという気持ち。

エ 全力は出しきったものの、朗読ライブが終わってしまったむなしさを「**柚葉**」と共有したいという気持ち。

問十 —— 線⑧ 「希望とぬくもりがじわじわと柚葉の心に広がっていく。」とありますが、「希望とぬくもりがじわじわと柚葉の心に広がった」とはどういうことだと考えられますか。次のア～エの中から最も適切なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 朗読ライブをやりとげたことで「朝佳」に自信がついて新しい好きなことも見つけようとしていると知り、今後物語を書き続けようという決意と「朝佳」の前向きさに胸を高鳴らせているということ。

イ 物語を書く自分の姿が落ち込んでいた「朝佳」をほげまして新しい好きなことを見つける手助けになっていたと知り、物語を書くことへの自信と「朝佳」の優しさに胸がいっぱいになっているということ。

ウ 朗読ライブを二人で行うことが「朝佳」にあきらめかけていたことへの再挑戦を決意させたと知り、「朝佳」を立ち直らせたことへの誇りと「朝佳」のこれからの活躍への期待に胸が弾んでいるということ。

エ 「朝佳」が物語を朗読することで過去の未練を断ち切って新しいことを始めようとしていると知り、自分の物語が「朝佳」に力を与えたことへの驚きと「朝佳」の思い切った決断に胸が騒いでいるということ。

問十一 —— 線⑨ 「賛同を意味する拍手」とありますが、どのようなことに「賛同」して「拍手」したのですか。次のア～エの中から最も適切なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 「朝佳」がうまく読めなかったことを客席に謝ったとおり、朗読ライブの最初は下手だったということ。

イ 手を握り合う二人の姿に強いきずなが感じられ、「朝佳」の「柚葉」への気づかいいも感心したこと。

ウ 朗読を終えた「朝佳」や「柚葉」に直接感想を伝えられるよう、客席に発言の機会を与えてくれたこと。

エ 「柚葉」が「朝佳」にかわって朗読した場面が感動的で、その後の「朝佳」の朗読もすばらしかったこと。

問十二——線⑩「背を丸め、柚葉は今度こそ泣き崩れた。」とありますが、このときの「柚葉」についての説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 客席から批判的な感想を言われるかもしれないと思って身構えていたところ、「また聞きたい」という言葉を言われたので安心して気がぬけてしまっている。
- イ 客席からあがる容赦のない感想を聞いているうちに作品への自信を失いかけていたところ、「また聞きたい」という言葉にはげまされて勇気がわいてきている。
- ウ 客席からの称賛の言葉に心を打たれていたところ、さらに「また聞きたい」と言われたことでうれしい気持ちがおさえきれずにあふれ出てしまっている。
- エ 客席からの厳しい感想に傷ついた気持ちを落ち着けようとしていたところ、「また聞きたい」という言葉もあがったのでどう反応してよいかわからず混乱している。

問十三

——線⑪「朝佳ちゃんのおかげで、私、人生で忘れられない一日ができたよ。本当に、ありがとうね。」とありますが、「人生で忘れられない一日ができた」のはなぜだと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア トラブルを乗り越えて朗読ライブを成功させることができたうえに、笑われることに対する考え方が変化し、挑戦したいと思ったことをやりとげれば自信につながるのだとわかったから。
- イ 周りから笑われる不安を乗り越えて朗読したことに対し、客席から自分を応援してくれる声があったことで他人を信じて自分を表現することも必要だということがわかったから。
- ウ 朗読ライブを通じて「朝佳」との友情を深めることができたのではなく、客席の人たちとのやりとりによって、笑いには相手を見守って安心させる効果もあるということがわかったから。
- エ 周りから笑われることを気にして人前での朗読に不安を感じていたが、称賛されたことで「朝佳」と一緒に人前に立つ経験を積んでいけば自信をつけられるということがわかったから。

問十四

——線⑫「最低だけど最高だったな。」とありますが、どういうことですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 朗読が止まり「柚葉」に迷惑をかけた部分は最低だが、「柚葉」が自ら朗読して客席から称賛されたので、思いがけず友達に自信を与えられた部分は最高だと思えるということ。
- イ 朗読がうまくいかなかった部分は最低だが、等身大の自分の姿を「南美」に見せたことで、「南美」が心を開いて素直な気持ちで聞けた部分は最高だと思えるということ。
- ウ 朗読が失敗してしまった部分は最低だが、「柚葉」と一緒に朗読ライブをやりとげることができ、「南美」とも心を通わせることができたのは最高だと思えるということ。
- エ 朗読が途中で止まった部分は最低だが、客席からいい話だったと言ってもらえたので、朗読に左右されない作品の価値が証明されたのは最高だと思えるということ。

問十五 文中で語られている朝佳の人物像としてあてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 自分の気持ちを素直に表現することができ、思いついたことをすぐに実行する行動力のある人物。
- イ 大変なときでも自分のことだけを考えるのではなく、他者の気持ちを思いやれる優しい人物。
- ウ 客席がざわついたり心ないことを言われたりしても動じない、自信に満ちあふれた人物。
- エ 失敗しても落ち込んだままではない、何度でも挑戦しようとする前向きな人物。

問十六 本文の内容として適当なものを次のア～エの中から二つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 「朝佳」が「南美」の視線に気をとられて調子を崩したことで朗読が止まってしまったことから、「柚葉」は「南美」の予期せぬ突然の来場を迷惑に感じてうらめしく思った。
- イ 人目を気にして不安になってしまふ「柚葉」にとつて、「朝佳」にかわつて物語を人前で朗読することは自分のなかの勇気をすべてかき集めても足りないぐらゐに強い決意が必要なことだった。
- ウ 「ちひろ」は「柚葉」が大きな声で読み始めると安心してライブ会場から出ていったが、「紗英」と「藍」は「柚葉」が自信に満ちあふれて朗読する姿に驚いて真剣な眼差しで最後まで朗読を聞いていた。
- エ 朗読ライブが始まる直前に会場へ到着した「南美」と「朝佳」の間には緊張感のようなものがただよっていたが、ライブ後にはほぐれて「南美」は「朝佳」に感謝の言葉を伝えた。

二 次の漢字と言葉に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の――線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 会社のロゴをシヨウヒヨウ登録する。
- ② 大臣が各国をレキホウする。
- ③ 冬に池の水がヒヨウケツする。
- ④ 社長が工場をササツする
- ⑤ やせた土地をコヤす。

問二 次の①～④の――線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 景勝の地を旅行する。
- ② 多くの島が海上に散在している。
- ③ 車窓から外の様子をながめる。
- ④ 一代で会社を築き上げる。

問三 次の①～④の文中の□にあてはまる言葉として最も適当なものを、それぞれ後のア～エの中から一つずつ選び、その記号を答えなさい。

- ① ほかの受験生のじやまにならないよう、おしゃべりを□。
ア まどろむ イ ねぎらう ウ ほのめかす エ はばかり
- ② 動物の生態を□記録したレポートが、コンクールで入賞した。
ア おもむろに イ つぶさに ウ かたくなに エ やにわに
- ③ 今回の事件の□を報告する。
ア ちまた イ すべ ウ あらまし エ まれ
- ④ 自己主張の強い私とちがって、妹は非常に□性格だ。
ア つつましい イ わびしい ウ つましい エ おびたらしい

問四 次の文は二つの意味にとることのできるあいまいな文です。二つの意味とはそれぞれどのような意味ですか。その意味の違いがはっきり分かるように、例にならって書き直さない（書き直すときに、他の言葉に置きかえたり、言葉をならびかえたり、読点を加えたりしても構いません）。

例 私は妹に自分の部屋で勉強させた。

意味1 私は妹に私の部屋で勉強させた。

意味2 私は妹に妹の部屋で勉強させた。

私はあまいすいかとぶどうを食べた。

意味1…

意味2…

